

滑稽俳句と俳号の謎(2)

八洲忙閑

俳号からはいささか脱線するが、本名以外の別称では、芸名、筆名（ペンネーム）、ラジオネーム、愛称（ニックネーム）などなど溢れんばかりにある。そのうち新聞や週刊誌などのお笑いコーナーの投稿者名には、滑稽味のあるネーミングがあって思わず「ニヤリ」とさせられる。

例えば新聞では、朝日「かたえくぼ」（千葉版に「千葉笑い」）、東京「笑ケース」、毎日「ふんすい塔」、読売「USO放送」や、週刊読売「シャレ・アップ」に寄せられたユニークなネーミングを順不同で挙げてみよう。

下町人、竹輪の友、昼あんどん、変竹林、三奥園、あっそうか（草加）、沸点、臨海和笑、団扇話、酒もっと、（平塚）雷鳥、今竹生、扁平足、極楽とんぼ、野中一軒家、毒取去人、俳人部長、国才人、摩天郎、非摩人、茶臼、雑木林、茶山花袋、異人館、青九才、幾星争、征胃大腸軍、半風子

例として挙げた「千葉笑い」は、朝日新聞の千葉版に掲載されているもの。コント、狂歌、どどいつ、川柳、回文、アナグラムなどユーモアと風刺のきいた作品を募っているお笑いコーナーだ。「千葉笑」は、冬の季語として歳時記にも載っているものがある（文末参照）。

さて、俳号に戻ろう。滑稽俳句協会会報にこれまで（三十五号以降）に載った本名以外の俳号で投句された人をピックアップしてみる。俳句界誌のいう「不可解かつ物語性に富む」俳号もあるのではなかろうか。ご本人に謂れを訊いてみたいものだ。それでは独断で抽出した俳号を列記する。

板倉肱泉、越前春生、大澤酒仙奴、小川鈍太、酒井鹿洋、下嶋四万歩、

高橋きのこ、田村米生、土屋泰山、永島董玉、ひがし愛、三塚不二、三橋百笑、都吐夢、百千草、柳紅生（敬称略）

このうち、比較的新しく入会された大澤酒仙奴氏は、酒仙奴＝守銭奴を連想させ、敢えて自分をして酒をからめて貶めたネーミングと推察する。たしか、東北地方の酒の銘柄に「酒仙」があったやに思う。酒好きの小生にとって、「酒もつと」と並んで“クスリ”とさせられる。

「あの月はみんなのものと子を諭し(酒仙奴)」。

この句は酒仙奴氏が協会に入会され、初投句でいきなり特選になった（二〇一四年十月号）極めて異例の“出世作”だろう。八木健会長のコメントに「名月をとってくれろと泣く子かな」の本句取りですね。…とある通りで、拙句に「背伸びして届かぬ月に悔しがり」がある。

同じく十月号の特選句に「案山子翁秋田小町に一目惚れ（永島董玉）」があり、拙句に「新米や小町に惚れてこしひかり」。会長の「秋田小町腰光らせて稲を刈る」と、まさに艶っぽい句のお友達ですね。

【千葉笑】江戸時代に千葉寺（千葉市にある真言宗豊山派の寺）で行われていた奇習で、大晦日の深夜から元日の未明まで、面などで素性が分からないように仮装して集い、役人の不正を批判したり、社会への風刺をして笑い合った。

（続く）